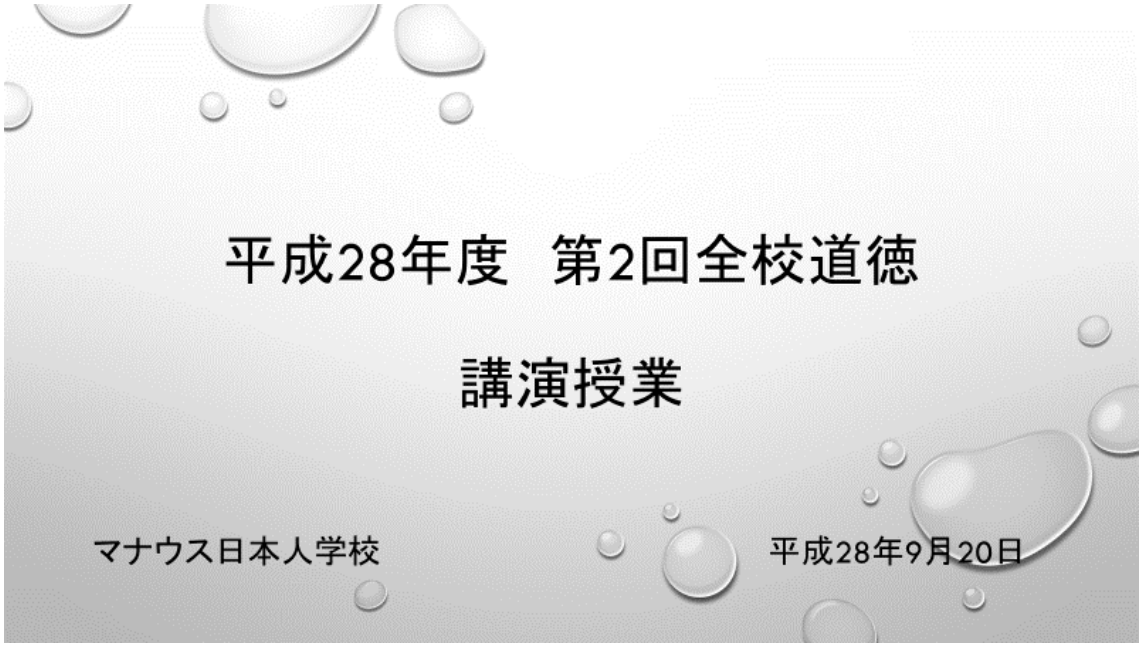
平成 28 年度　第 2 回全校道徳講演授業

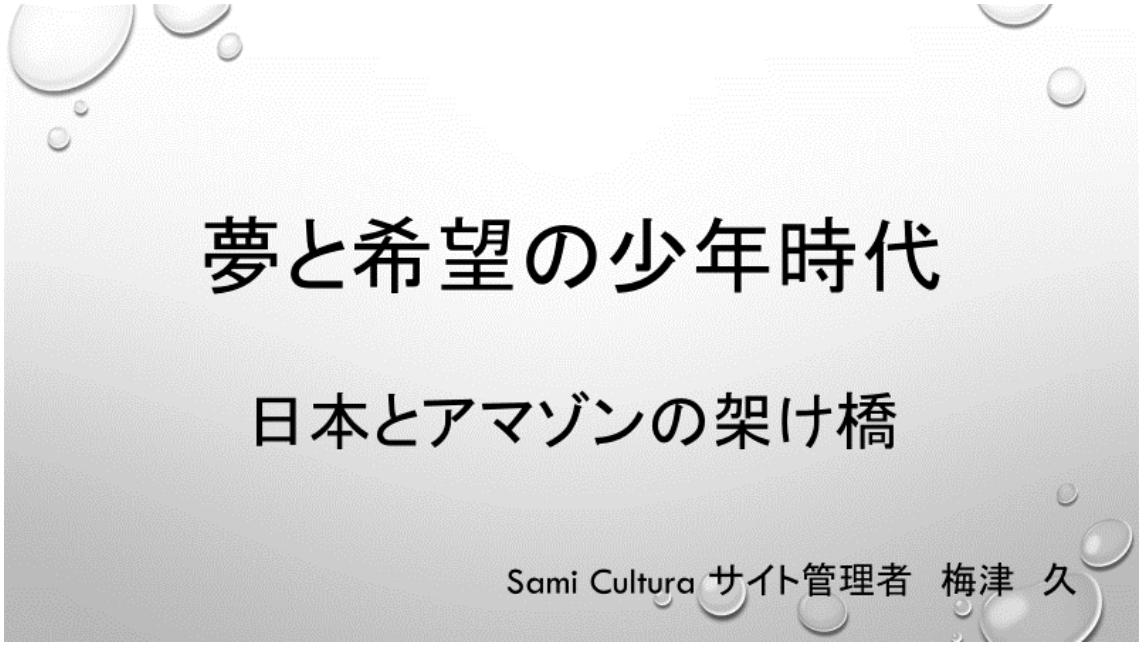
平成 28 年 9 月 20 日（火曜日）　2 校時（８：45～９：30）

アマゾン/マナウス/ＺＦＭ情報サイト Sami Cultura 管理者　梅津久

“夢と希望の少年時代”　～日本とアマゾンの架け橋～



皆さん、おはようございます。
ただ今、紹介を受けました梅津久です、よろしくお願いいたします。



今日の講演のタイトルは**“夢と希望の少年時代”**、サブタイトルとして**“日本とアマゾンの架け橋”**となっています。私の少年、青年時代の話をしますので、皆さんに少しでも記憶に残してもらい、後になって、あんな話を聞いたことがあると思い出してもらえればうれしいです。

今日の皆さんは、小学 1 年生から中学 3 年生まで一緒なので何を、どのように分かりやすく話したら良いのか困っています。また顔見知りの方からは、「どんな話を聞けるのか楽しみにしていますと！」と言われ、これは大変なことになったと思っています。

私の言葉は、東北は“福島弁”で“サシスセソ”がうまく発音出来ず、さらに最近舌（ベロ）の回りが悪くなり“ラリルレロ”が上手く発音できなく聞き取りにくいと思いますが簡便してください。また途中でわからない事がありましたら遠慮せず手を挙げてください。

それでは、初めに、私の今までの足跡を簡単に説明します。

生れは 1984 年で、東北は福島県福島市、（この福島市の地図のここ）磐梯吾妻スカイラインの高湯街道沿いの山の麓（ふもと）、果樹園農家の末っ子として生まれ、梨やリンゴ、桃等の果物を食べたいだけ食べながら育ち、高校時代まで福島で過ごしました。高校卒業後、18 歳で当時の集団就職で横浜市綱島に出ました。そこで昼は働き、夜は神奈川大学工学部に通い、最終学年の時に、ブラジル移住を決意、会社をやめ、日本で唯一移住科のあった（神奈川県）秦野（専修）職業訓練校に半年通い、大学と訓練校を同時に卒業してから、ブラジルにきました。

私は、第 1 回のジェット機での移住者の一人で、1973 年の 7 月、羽田空港からロスアンジェルスに一泊して、サンパウロ市内のコンゴニアス空港に着きました。

ブラジルでは、サンパウロ市とモジ・ダス・クルーゼス市に 11 年、そのあと 1984 年にマナウスに移り 32 年になります。

これは、私が技術移住者として羽田空港を出発した時の写真です。父が、新聞に出たのを見て、新聞社に連絡を取り手に入れた写真です。

次に、ちょっとビデオを見てください。音はありませんが昔の移民船の風景です。

本当は、このビデオのように、この年 1973 年 4 月出港の最後の移民船で素晴らしい見送りを受け、船内でのんびりして、パーティーを楽しみ、各港で船を下り、遊びながら 45 日ほどかけてゆっくりした船旅で来る予定でした。

そんな移住を夢みていたのですが、移住を決意し手続きを始めてから、大学の部活動の女性友達に「俺はブラジルに行くけど、お前も一緒に行くか？」と喫茶店（カフェー）で何気なく誘ったら、彼女は「一緒に行ってもいい！」との返事、慌ててすぐに実家に電話をし、急遽結婚式を挙げ、単身移住から家内と二人の家族移住への変更手続きを行いました。その準備のために最後の移民船に間に合わず、飛行機での移住となったのです。

まだ若き 25 歳の夏です。　船での出発のような“お別れテープ”もなく、スーツケース１つに、レーンコートを腕に引っ掛け、短波ラジオと一眼レフカメラ持って羽田を出発した時の写真です。海外旅行に行くような気軽な気持ちで、2－3 年したら戻ってくればいい

と考えて、日本を出発しました。

“第 1 回ジェット機で移住”ということでこの様子は新聞に大きく取り上げられました。ここに書いてある、“日本脱出、手荷物だけ”、“新婚旅行もかねて”のことは、どうも私のことのようでした。このとき一緒だった 45 人の移住者達の中で、荷物を船で送らずスーツケース 1 個だけでブラジルに渡って来たのは私と家内（妻）だけでした。

このように簡単な気持ちで、ブラジルに来て、すでに 43 年なってしまいました。
右の写真は福島県知事に移住の挨拶に行き、知事に直接激励された時の写真です。

たぶん、皆さんが最初に聞きたいことは、「どうしてブラジルに来たの？」ということだと思いますが、その前に、果樹園農家に生まれ、果物を食べたいほど食べて育ったといいました。その果物を見てみましょう。

これらの写真は、私が子供時代に家の畑や裏庭からとって食べていた果物の一部です、皆さん、この白黒写真から果物の名前がわかりますか？　良く見てください。

その前に、私の生まれ故郷福島のフレーツラインのビデオをちっと見てください。

福島市飯坂から庭坂に向けてのフルーツラインのビデオです、両側、次から次へと果樹園が続きます。直売所もたくさんあり、果物狩りのできる果樹園もあります。

これらの写真、12 個全部わかった人はいますか？

それでは一個一個見てみましょう。梨、リンゴ、から始まって、桃がありました、ブドウ、西洋ナシがあり、イチゴ、栗、イチジク、スイカ、桑の実、柿、最後はグミです。

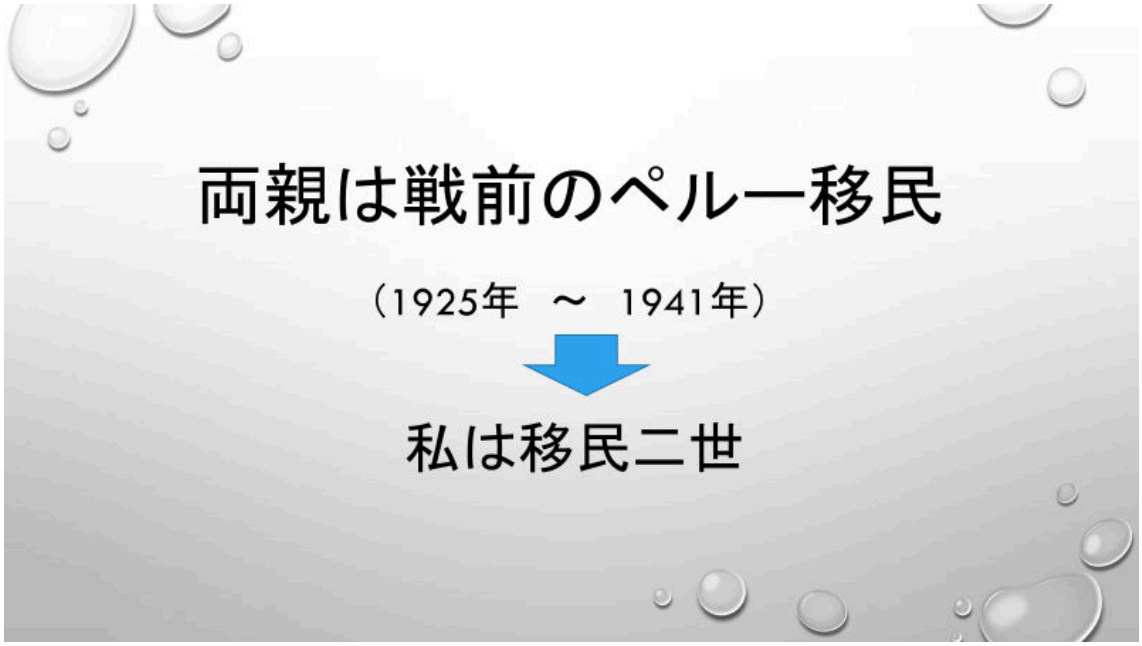
皆さん、これらの果物を食べたことはあると思いますが、木になっいるものを、じかに手でもぎ取って口にほうばる感触は最高です。皆さんも機会があればぜひ体験してみてください。

また、こんな物を食べた思い出もあります。

栗の木に育つ栗虫の幼虫、串にさして、父から「かんにいいから食べろ！」と食べさせられました。イナゴは秋の稲刈りの頃になると、みんなでイナゴ狩りをし、そしてお母に“佃煮”にしてもらって良く食べました、“カッリ、カッリ”ととても美味しいのです。秋になると弁当のおかずはこれでした。

また懐かしいお袋の味は、チソ味噌、豆味噌で、何時も弁当のおかずに入っていました。今でも福島の実家に帰ると義理の姉が作ってくれて、ブラジルへ持ち帰っています。皆さんも、お母さんが作ってくれる食事は好き嫌いなく何でも食べて、お母さんの味を覚えてください。

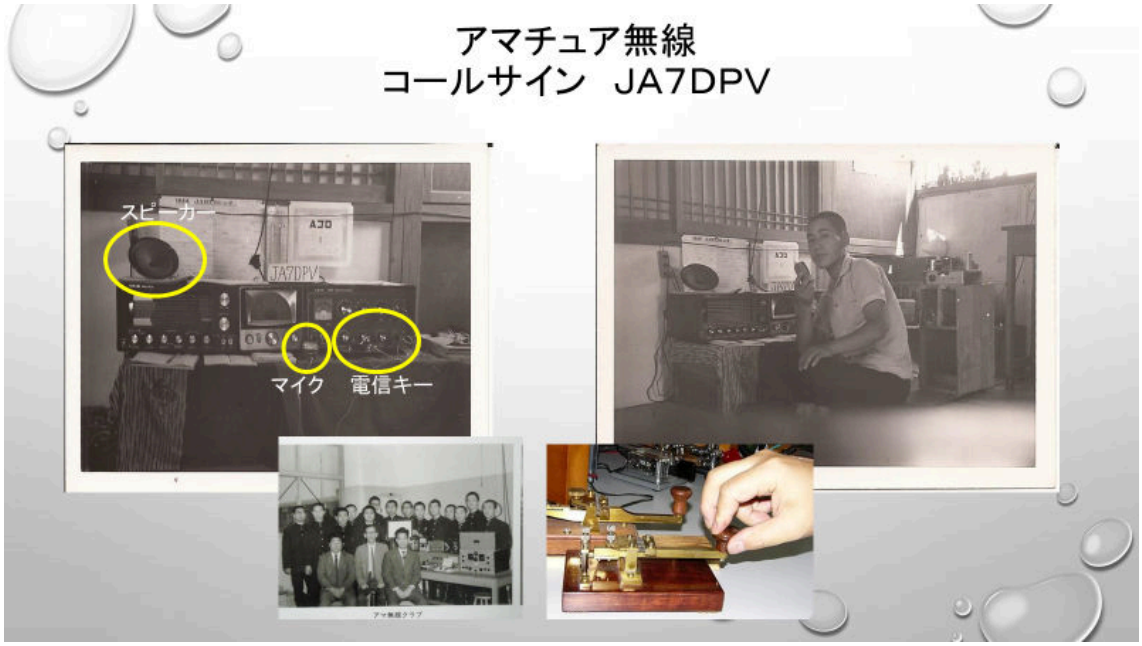
それでは、先ほどの「どうして、ブラジルにきたの？」という話に戻ります。



実は、私の両親は戦前のペルー移民です。ですから私は**移民二世**になるわけです。

父や母は戦前の農業家族移民としてペルーに渡り、想像を絶する苦労をしたと思われますが、いつどのように渡って、どんな苦労をしたのかは話しませんでしたが、ペルーの首都リマ市で現地人を何人か雇い雑貨屋、金物屋を営んでいました、ところが太平洋戦争がはじまると同時に、排日運動といって日本人の家や店が襲われる出来ごとが激しくなり、いつ自分たちも襲われるかわからない、ペルー人の忠告もあり、ペルー生まれの兄二人を連れ最後の移民引き上げ船で日本に戻ってきました。次の引き上げ船は途中で沈没されたと聞いています。

そんなことから、家には両親のペルーでの生活写真や、ペルーインカ文明の写真と一緒に当時は珍しい、西洋ハサミ、西洋カミソリ、バリカン、コーヒー豆の袋、コーヒー豆を引くミル、コーヒーポットなどがありました。多分引き上げる時に持ってきて、大事に使っていたのだと思います。当時、豆をひいてコーヒーを入れて飲む事は珍しかった時代ですが、母はコーヒーが好きで、亡くなる直前まで毎朝飲んでいました、また私の中学・高校時代、夜勉強をしていると母がよくコーヒーを入れてくれました。母の墓参りにコーヒーは欠かせませんし、そんな環境で育ったため、一度は海外に行ってみたいという夢が芽生えたのだと思っています。



さらにその芽が大きくなるのは、高校時代にはまった、アマチュア無線です。

アマチュア無線局を自分の部屋に開設しました。これがその時の写真です。果物を作っていた家なので、机は間に合わせに梨箱を使いました。

週末や休みの時は、「CQ, CQ, This is JA7-DPV, J-Juliett, A-alfa, 7-Seven, D-Delta, P-Papa, V-Victer, JA7DPV　応答願います。」と話し相手を探したり、「ブレーク、ブレーク　This is JA7-DPV」と相手の話の中に割り込んでだりしていました。日本全土、時には海外の無線家と片言の英語で挨拶し、交信カードの交換をしていました。ちょっと交信を聞いてみましょう。

昔と違って今の皆さんは、携帯電話でソーシャルネットワーの、Skype や　Line を使ってビデオ会話が出来たり写真を送りことが自由に出来ますが、私の学生時代、TV 電話やビデオ電話は夢の世界の事でした。しかし、アマチュア無線は、何時でも、どこでも、だれとでも話が出来て、また自由に他人の会話を聞くことができます、さらに自分のアンテナから通信するので、いくら話しても無料ですし、電話回線が使えなくなる災害や非常事態にも使用できるので、多くの人が利用していました。今でもまだアマチュア無線をやっている人はたくさんいます、NHK　“あさイチ”の柳沢さんが代表的な方です。

また、モールス通信といって言葉ではなく、音の短点と長点の組み合わせで相手と通信もしました。モールス信号は電波の信号が弱くてもトン、ツー、トン、ツーだけで聞き

取ることができるので遠くまで届き、また世界中で共通の信号を使っています。

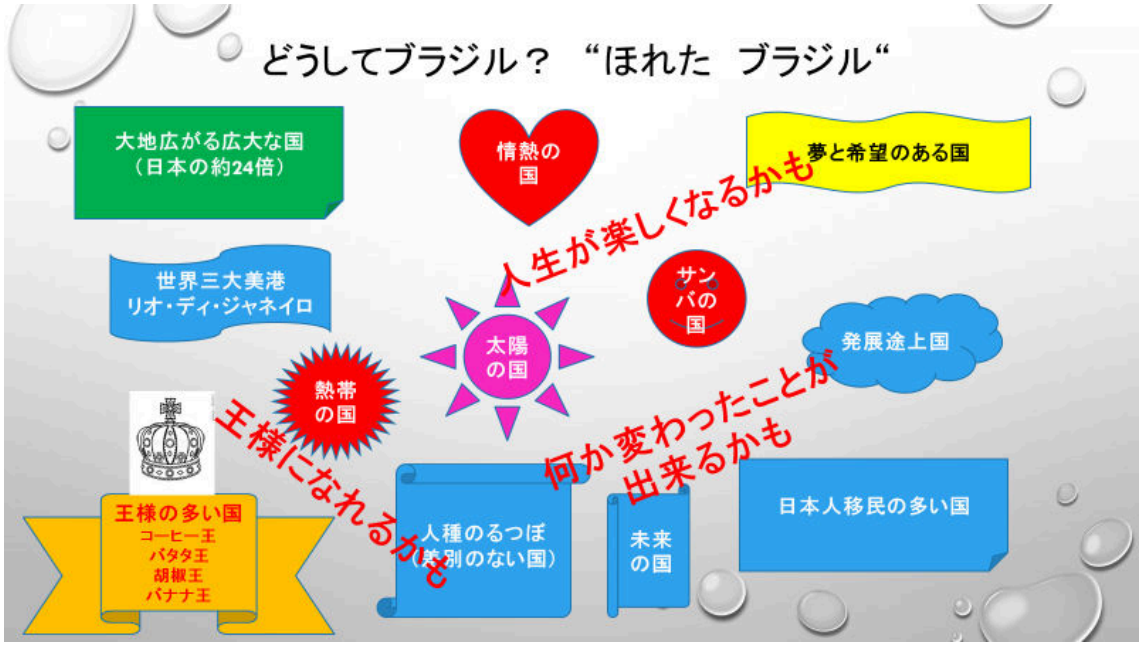
たとえば、遠くから助けを呼ぶ時は、「助けてー」と「SOS」信号を出す時は、「S…、　O　ー　ー　ー、S・・・ですから」「トン　トン　トン、　ツー　ツー　ツー、　トン　トン　トン」となり、これを繰り返せば良いわけです。

さらに、大学時代は英会話サークル部に所属し、仕事では、沖縄が日本に返還になった時、いち早く沖縄に行く機会があり、初めて日本にはない外国の文化に触れたことも海外に行ってみたいとうい夢に火が点いたのかもしれません。

仕事では、海上自衛隊の船舶レーダー画像の記録装置、沖縄返還に伴い沖縄にあるアメリカの放送局の“ボイス・オブ・アメリカ”を傍受する 24 時間マルチチャンネル記録装置など特殊電子機器の設計、生産の仕事についていたので、海外のいろんな話を耳にする機会も多く、こんなことから海外に行ってみたいという夢が膨らんだのです。

では、「なぜブラジル？」に決めたのか？

太陽の国、大地広がる広大な国、未来の大国などのキャッチフレーズに引き込まれたのです。



当時、ブラジルといえば、

“大地広がる広大な国”、“世界三大美港であるリオ・ディ・ジャネイロ”、“太陽の国”、“熱帯の国”、“情熱の国”、“サンバの国”、“人類のるつぼ”（白人、黒人、黄色人、現地インディアン、いろんな国の人々が差別なく生活していることで、他にはない。）、“日本人移民の多い国”で、“発展途上国”であり、“未来の国”、“夢と希望のある国”そしてコーヒー王、バタタ（ジャガイモ）王、胡椒王、バナナ王のように“王様の多い国”と聞かされていました。特に人種、他国民、貧困の差別がなく自由な国。こんなところで生活したら、“人生が楽しくなるかも”、“何か変わったことが出来るかも”、ひょっとして私も“王様になれるかも”、そう考えてブラジルにきました。

ちょっと余談になりますが、私のブラジル移住には両親が非常に反対したと兄から聞いていました、しかし兄が「親父もお袋も、自分たちだって移住して帰ってきたじゃないか、どうして反対するのか、“久”が思っているようにさせたらいいだろう！」と云ってくれたと聞いています。それで両親は「せめても“久”に嫁を取らせて行かせてやりたい。」と言っていたそうで、私の突然の結婚話には大喜びだったそうです。また兄は「“久”何時帰ってくるんだ、体には気をつけろよ！」と会うたびに云っていました。その兄も他界してしまいましが、今の自分は兄の影の応援の結果だと兄に感謝しています。

次に、私の子供、少年、青年の頃の話をします。

皆さんもそれぞれ子供の頃の思い出を持っていると思いますが。

私の場合は、生まれつき病気がちで、身体のいたるところに腫瘍のできる「くさ」と呼ばれる「かぶれ」病気で、痒さにがまんできなくて泣きながら母の背中に背負われバスに乗って病院に通った記憶が今でもあります。母は大変苦労したようですが、後になっても苦労話はしませんでした。

私はこのように背が小さく力がなく、同級生の中でも一番背が低く、列に並ぶといつも一番前でしたが、頑固で短気で、負けず嫌いでよくケンカをしていました、喧嘩してもいつも負けて、泣きながら家に帰ってくることがよくありました。

夏は、近くの川（天土川）で、石の下に隠れている「カジカ」という「ハゼ」を小さくしたような魚を、水の流れをせき止めながら取って遊んでいました。この「カジカ」を家に持ち帰って、串に刺し、囲炉裏（いろり）であぶって食べる味は最高でした。また、その川に水遊びに行く途中、近くの農家のスイカを内緒で頂いて、要は盗んで、川に浮かべ、冷えたスイカをほうばったものです。

冬は、家の裏の日陰に雪で坂を作り、自分で作った竹スキーや竹そりで遊んでいました。また、空き缶で作った靴を作って遊んだこともありました。

半面、頑張り屋だった面もありました、小学校の終わり頃には、新聞配達のアルバイトをしました、朝早く起きて、自転車で約４Ｋｍはなれた隣町の新聞配達店に行って、新聞の部数を数え、広告のチラシを挟んで持ち帰り部落の家に配ってそれから学校に行きました、冬の雪降る寒い日は手が凍えそうになり大変だった記憶があります。しかし「おはよう、ご苦労さん！　大変だね、ありがとう！」と声をかけられ頑張ったものです。その頃は、まだ子供用の自転車が家にはなく、背の小さかった私は、大人の自転車のイスに座るとペダルに足が届かなく乗れないので、“三角乗り”をしていました、この乗り方、バランスを取るのが難しく、覚えるまで苦労しました。

中学の頃になると、果樹園である私の家が磐梯吾妻スカイラインの観光道路の道沿いにあったことから、父が家の前でリヤカーに果物を小さなかごに入れて売り始めたのを学校から帰って手伝いました。車が止まり、お客さんが車から降り、1 かごでも 2 かごでも買ってくれた時はとてもうれしかったです。夜は、梨やリンゴをかごに入れる手伝いもしました。

また、友達から誘われて、磐梯吾妻スカイラインの観光スポットである浄土平、吾妻小富士で絵葉書を売るアルバイトもしました。これら新聞配達、果物売りの手伝いや絵葉書売りのアルバイトは親から言われてやったのではなく、親に頼らず自分で自由になるお金がほしくて私のほうから親に頼んでやらせてもらっていました。親も反対はしませんでした。

これらのアルバイトのお金は、親のペルーでの手紙の切手整理から始まった切手収集

の趣味に使っていました。切手収集はブラジルに来るまで続き、自慢できるほどの種類と数になり、ブラジルに持ってきて、お金に換えてしまいました。ブラジルに来た時の唯一の財産でもありました。

ただ、絵葉書売りのアルバイトでは、実は１日目に大きな失敗をしてしまったのです。吾妻小富士という富士山を小さくしたような山の頂上で絵葉書を売っていて、昼ご飯のために山を下り始めたところ、何らかの調子で足が滑り、走りはじめた私、火山灰の小石だらけの山肌では、どうやっても止まりません、だんだんと加速し、最後は頭からスライディングするように転んでしまいました。そのため、頭のてっぺんを４針ほど縫う大けが、さらにこの前歯 2 本を折ってしまいました。そのため、このアルバイトは半日で終わってしまいました。

その後のアルバイトは高校時代に電気店で働いたことです。
高校は工業高校電子科でしたので、電気店でテレビやラジオの簡単な修理や、お客さんの家に製品を届け、取り付け、使い方の説明をするアルバイトをしました。この頃すでにオートバイの運転免許を取っていましたので、客先をオートバイで回っていました。このアルバイトはお金になりました。おかげで、アマチュア無線の受信機、送信機を買ったり、アンテナを家の屋根上に取り付けるなど自由なことができたのです。

スポーツは、背が低く小さいのであまり得意ではありませんでした。それでもいろんなスポーツをしました。中距離走を良くやり、高校時代はクラス対抗の駅伝大会があり、クラス代表で走りました。クラス対抗の卓球では優勝もしました。バレーボールは 9 人制

の後ろでレシーブを担当し、ジャンピングレシーブや、回転レシーブをよくやったものです。ソフトボールは、腕力がないので外野とかサードはダメ、瞬発力でショートやセカンドを守りました、打つほうは長打力はなく、せいぜい内野の頭を超えるくらいでした。ボーリング、これは一人でもできるのでマイボール、マイシューズで仕事が終わってからボーリング場通いをしました。テニスは高校で軟式テニス、社会人になって硬式テニスをやりました、テニスはもう少しで 70 歳になる今でも続けています。マナウスでゴルフも始めたのですが、隋看板ヘルニアで 2 度歩けなくなり、1 度は日本で腰痛が発生し成田からサンパウロ経由マナウスまで車いすで戻ってきました。そんなことがあってゴルフは断念しました。

今でも残念に思いっていることは、先ほどよく川遊びをしたといいましたが、泳げるほど深い川でもなかったし、昔は小中学校にプールがなかったので泳ぎを覚えることが出来ず、今でもカナズチです。釣に誘われるのですが、溺れるのが怖くて断っています。また、音楽は大の苦手で点数が１か２、音痴で歌えず、楽器は何もできません。これらは、泳ぎと音楽ができないことは大人になったいまでも残念でなりません。私のようにならないように、泳ぎを覚え、歌を歌って、楽器を習ってください。

それでも、今思うと、自分でも驚くほど、よくいろいろなことをしたと思います。
皆さんも、自分でこれだと思うこと、興味のあること、やってみたいとを積極的にやってみてください。うまくいっても、いかなくても、非常に大事な経験となって、自分に合った趣味やスポーツが身に付き、大人になってから、何らかの形で役にたちます。絶対に無駄はありません。勇気とチャレンジ、思い切りです。

次に私が管理している Sami Cultura　のサイトに関しての話をします。

この写真はホテルトロピカルの港からネグロ川の夕焼けを撮った一枚です。帆掛け舟がちょうど小舟を引いて走っていました。次のボーイダンスは、たまたまエドワルドヒベイロの日曜市に行った時に撮影した１コマです。傑作品のひとつです。）

私が Sami Cultura のホームページを作ったきっかけをお話しします。

8 年前に 60 歳で定年退職をまじかに迎えた頃、退職して、仕事を辞めたら何をやろうか、一日家に何もしないでいたら体にも健康にも悪く、早く年をとってしまうだろう、なにか出来ることはないかと悩みました。

私は 18 歳から 60 歳まで 42 年間製造業で働いてきました、それもブラジルで 35 年間、ブラジルの日系企業で働き、日本からブラジルに指導に来られた数多くの日本人の技術者、管理者や監督者の通訳をやり、資料の翻訳をやりながら、ブラジル人と日本人の意思疎通の**“架け橋”**にもり、そして自分自身も製造現場、工場の管理監督をしてきた、それならばこれからも**“日本人とブラジル人の架け橋”、“日本とアマゾン、マナウスの架け橋”**になり、自分の経験、実践してきたこと、知っていることをすべて記録に残し皆に見てもらいいば良いではないか。ブラジル語をある程度マスターしてきた日本人移民一世は、私の世代が最後になる、そのあとは日系二世、三世の時代で日本語の読み書きのできる人がだんだん少なくなっていく中、大事なことかもしれない。よーし、自分のホームページを作ろうと決心しました。

このとき丁度、家内は公文式日本語の教室を開いていて、“Sami Cultura Língua Japonês Ideomas Ltda（サミー・クルトゥーラ・日本語会社)”という会社を立ち上げていたので、この会社の名前でホームページを作成しそこに情報を書き込もうと思いつきました。

名前の“Sami”は二人の娘の名前、沙矢香の Sa、瑞希の Mi を引用したものです。

このホームページは日本語のわかる人、わからない人どちらも利用できるようにポ語と日本語の二か国語バージョンにし、マナウスの社会・経済、観光・食べ物、ZFM に関係する情報を満載し、必要であれば日本語－ポ語の翻訳・通訳のお手伝い、また日本語指導をできるようなホームページを立ち上げることにしました。

特に技術専門用語の通訳・翻訳は難しく、普通の辞書を調べてもわからないことが多いので、技術専門用語の辞書モジュールを設け、自分の知っている単語、熟語を全て取り込んで、皆さんに辞書検索として使ってもらうことにしました。現在登録されている単語は約 47,000 語になっていますが、まだまだ不十分ですからこれからも増やしていきます。また、工場管理に必要なブラジルの法律や決まり事を翻訳して掲載し、アマゾンやマナウスの様子や出来事をニュースとして写真と一緒に掲載しています。

さらに、現在個人的都合で中断しておりますが、“Sami 翻訳ニュース”といって、日本人の方の生活や日系企業に関係するポ語の地元のニュースを翻訳して Sami Cultura の連絡網を通して配信しております。

ホームページを開設したころは数人くらいしかアクセスしていませんでしたが、今で毎日 50 人くらいがアクセスしています、リピーターが約 35％です。

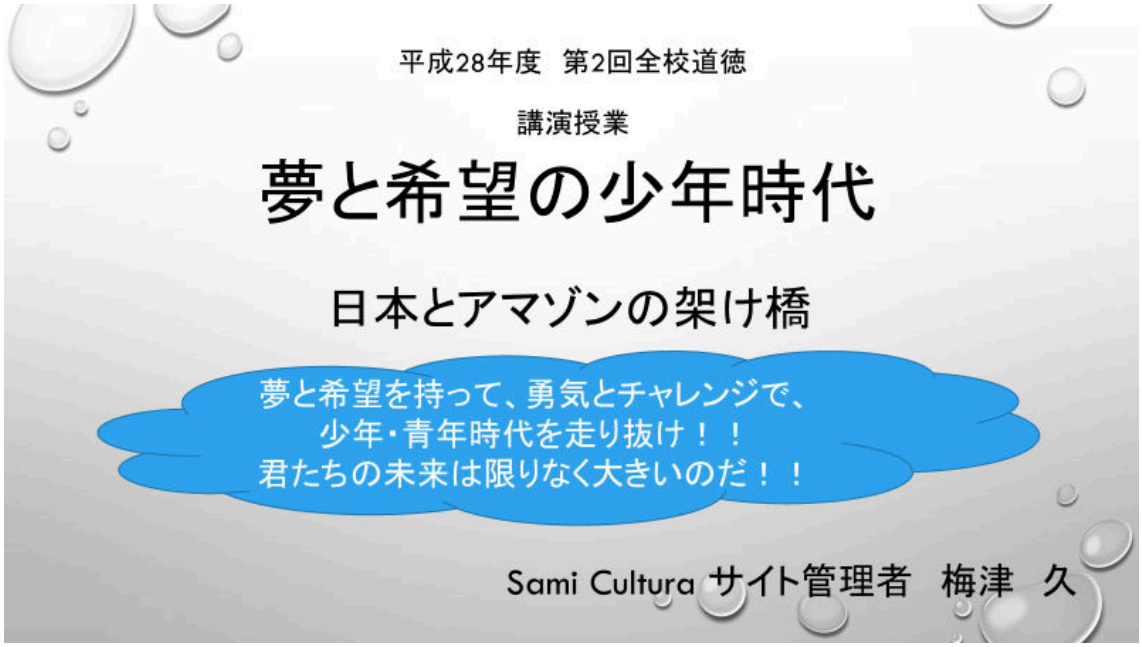
これから先、会社努めを辞め完全にリタイヤして自由な時間が増えたらどんどん内容を充実して行きたいと思っています。また、“Sami 翻訳ニュース”の配信を再開いたします。

今までの反響としては、翻訳して掲載している法規に関する問い合わせが幾度となく入っております。特に工場運営上のブラジルの労働災害安全に関する問い合わせ多いです。また西部アマゾン日伯文化協会、マナウス・カントリー・クラブに関する問い合わせも入ってきておりいろんな方々がアクセスされています。

特に講評なのは、小話（こばなし）“マイゾウ・メーノスの世界”です。皆さんもアクセスして読んでみてください。

時間があるようでしたら Sami Cultura　サイトの中身を簡単に見てみましょう。

簡単ですが Sami Cultura　サイトの紹介を終わります。



これで、私の講演は終わりますが、最後に皆さんに、言いたいことは。

何事にも興味を持って、聞いて、見て、実際にやってみることです、
スポーツでも、音楽でも、習い事でも、何か真剣にやってみることです。
失敗したり、気に入らなかったら、また別なことに挑戦すればいいのです。

特に、このマナウスでの生活の思い出をしっかりと記憶に残してください。
小学校 1 年生から中学 3 年生までが、また同じ年代の地元の人たちと一緒に学び、遊んで、食事、野外活動をしたことなどはマナウス以外の日本人学校以外では体験できないことです、一生の思い出になると思います。

常に“夢と希望を持って、勇気とチャレンジで、少年・青年時代を走り抜けてください”、“君たちの未来は限りなくおおきいのです！！”きっと今は想像もできない事に出会うでしょう、そのために勉強とスポーツと趣味に精一杯頑張ってください。

というメッセージを置いて講演を終わります。

どうもありがとうございました。